

教行信証の書写と印刷

小川 貫 弍

(龍谷大学)

一

浄土真宗の聖教について、その伝持の歴史は、書写の時代から印刷の時代へと展開した。その転換期は、中世の末ごろから近世の初頭である。就中、『教行信証』については、寛永十三年（一六三〇）の春、京都の中野市右衛門の開版が、その上梓の嚆矢であるとされてきた。

しかるに、先年、高田専修寺の宝庫から、これまでの定説をくつがえすような新しい資料が発見された^①。それは鎌倉時代の正応四年（一二九二）八月に、性海が『教行信証』の出版をくわだてて、その願主となり、鎌倉幕府の長崎頼綱（法名果円）をその檀越として、関東においてその刊行があったというのである。これは著者親鸞聖人の滅後三十年、寛永の開版より三百四十五年も早いことである。しかし、伝世の遺品もないから半信半疑の人もあり、これを傍証する諸条件の検討がまたれている。

いまは、これらの点を考慮して、鎌倉時代における本典の書写と印刷について、二、三の問題を考察したいと思

う。

二

文明二年（一四七〇）書写の奥書をもつ『教行信証』八帖は、各帖の内題のもと撰号のわきに、「明厳寺藏」の墨印を捺し、江戸時代の真宗学匠智暹の校本となったものである^②。これは六行本文で、毎行十七字詰の粘葉本の装幀である。書写による室町時代の浄土真宗の聖教として、もっとも典型的な形態をもつものである。その教巻の末には、「本云」として

寛元五年二月五日以善信聖人御真筆秘」

本加書写校合文義字訓等
重委註了 隠倫尊蓮六十六歳

今年聖人七十五歳也

とある。これと同文の奥書は、大谷大学図書館所蔵の『教行信証』の信巻本の末尾に、これは元弘三年（一一三三）乗専がこの奥書のある尊蓮本を依用し、それを暦応四年（一一三四）に転写したものに见えている。江戸時代の寛永十三年（一六三六）の開版は、この系統のものを底本としている。また康永二年（一一三三）願主乗智の所望によって本典の延書本ができた真仏土巻の奥にもみられる記録である。

これらの奥書によって、寛元五年（一二四七）二月五日、親鸞聖人七十五歳の在世中に、六十六歳の尊蓮が真筆の秘本から見写を許された『教行信証』―その系統につらなる転写本―が覚如・存覚の時代の京都では、その重要性が認められ、元弘・暦応・康永のころの本典書写の奥には校本として、この奥書が転載され、そのことが室町時代の書写から江戸時代の諸刊本にまで、永くその影響がつづくものである。

今日、西本願寺にある所謂清書本の『教行信証』については、鎌倉・南北朝・室町初期の時代にかけて、その伝

承の史実は、殆んど不明である。蓮如上人による『正信偈』『三帖和讃』の開版やその直後文明年中の吉崎の坊舎の炎上るとき、本向坊了顕が身をもって護持したというので、「腹籠の聖教」として、その後の伝承は明らかである。

西本願寺の清書本、その化土巻の尾題のあとには、朱筆をもって「和光同塵結縁之始 八相成道以論其終」と朱書の一行があり、その次の裏頁には

弘長二歳壬戌十一月廿八日

未尅親鸞聖人御入滅也

と、二行の墨書がある。このあと今は、欠紙となっているが、石川の弘願寺本（焼失）や福井の淨得寺本によって、さらに四行の文字のあったことが判明した。それは

御歳九十歳 同廿九日戌時

東山御葬送 同卅日御舍利蔵

仏滅後至二千二百三十五歳入末法後七百三十五歳当文永十二歳乙亥也依賢劫經仁王經涅槃經等説言

である。この一連六行の奥書は、清書本について直接の識語ではないが、本文とのあいだに、なにか深い関連性がある筈である。

この奥書が清書本の本文と別筆であるか、それとも同一人の筆蹟であるかは、大きく議論のわかれる点である。大正時代、辻善之助博士は『親鸞聖人筆跡之研究』によって、本文は聖人の真蹟であり、奥書は別人の追記であると決定をみたが、なお疑問をいだく人も少くなかった。中井玄道氏^④・鈴木宗忠博士^⑤らは、この清書本の本文と七行の奥書とを同一人の筆蹟とみている。若しも、後者の説によるならば、親鸞聖人滅後の書写本となり、聖人の十三

回忌をすぎた文永十二年（一二七五）の写本となるのである。

高田専修寺の清書本『教行信証』については、先年、生桑完明師の報告によって、^⑥現在欠紙となっている化身土文類の末尾に

以後六卷草本写書之 筆師專信之」

建長七歳乙卯六月廿二日午時畢書之」

とあったことが判明した。その次下には、別筆で

親鸞御入滅 弘長二歳壬戌十一月廿八日午時」

御歳九十歳也 同廿九日午時專信遠江國池田住僧顯智下野國高田住僧」

御舍利藏畢」

とあり、これと同文のものが教・信・真仏土の末尾にも見え、これは顯智上人の筆跡である。

これらのことから高田の清書本は、建長七年（一二五五）、聖人八十三歳の在世中に、専信房専海が草本の見写を許されたものであること。寛元五年（一二四七）の尊蓮本が失なわれた今日では、在世中の見写本として唯一のものであるという重要な結論が学界に提示された。

いまは、古来、清書本『教行信証』といわれてきた高田専修寺本と西本願寺本との共通性と、西本願寺本のもつ特異性をあげて、二、三の考察をこころみたい。その第一は、製書の装幀である。料紙を二つ折りにして、これを袋綴とした方冊本であることが、真筆の草本と清書本の三本に共通した体裁である。その後、聖教としての本典の装幀は、袋綴本から粘葉本にと、大きくその形態が変化し、江戸時代の刊本や写本は、再び袋綴本となるのである。その次、第二は、本文の行格に就てである。元来、草本は八行本文を主体とし、その後の改訂増補の結果、総

序や教巻、行巻や信巻のはじめに、七行本文のところが出来ている。この草本を見写するとき、総序や教巻の七行の行格にならって、全巻を統一して浄書することは、敢て不思議なことではない。七行本の行格は、清書の二本に共通するものである。それが後世の粘葉本となると、六行本に整頓をみるのである。第三には、毎行の字詰である。草本は十四・五字から二十字に近く雑然としたところもあるが、清書二本はともに十五字内外である。しかし、その後、聖教の体裁をととのえる粘葉本にみるような六行本文の毎行十七字詰の一貫性はまだ見られない。全く整頓以前の姿である。第四は、行間の字句、その一点一劃の筆致である。これは執筆者の教養や年齢とその他の人の筆くせ、殊に筆写の環境やその状況によって、微妙な相違が現れてくるものである。高田本は、遠江の専信房専海の見写と知った勢か、上京の身をもって忽々のあいだに、一気に清書した感が深い。真筆本の筆致の末端には、あまりこだわっていない。これを西本願寺本と比較対照すると、筆者の立場が違う以上に、後者は丁寧に、聖人の筆致まで、丹然に臨写している。急がないで、真筆の一点一劃までも、よくみてこれを忠実に写しとる努力と心がけ、筆者の敬虔な態度が筆の端々にまで現れている。この点が本文と奥書とが一見して別人の如くみられる西本願寺本の特異性である。

西本願寺本は、著者の聖人が好んで書かれた特色ある字劃の文字で、首尾一貫している。草本の行巻や真仏土巻の本文には、聖人の執筆でない第三者の浄書したところが数枚あるが、西本願寺本はすべて聖人使用の文字に書き改められている。この点からは、聖人自らの御清書であるという判断も出てくる訳である。もし左様であるならば聖人が晩年に用いられた新しい字劃の文字に整頓し、首尾統一されていて、然るべきである。ところが、西本願寺本の本文には、同一料紙のあいだに、聖人が比較的早い時期に使用された古い字劃の文字と極晩年の新しい字劃のものとのが、混同使用されているところからみて、到底、聖人自身の清書本とは決定し難いものがある。

およそ、原著者の自筆本が、その臨写本から転写本へと、年代の経過とともに、その底本がかわるにつれて、自筆本にみる個性のある著者の筆致は、漸次次第に喪失してゆく。時代とともに、製書の装幀も行格もかわり、本文の文字ばかりでなく、句読点や送り仮名づかいまで、それぞれの時代の特色を發揮することとなるものである。この点では、西本願寺本は、内容・外観ともに鎌倉時代の特性をよく伝える古写本である。

二二

さて西本願寺本の奥書、六行の記録には、筆者の名も見えず本文を書いた由来も文字になっていない。文永十二年（一二七五）を基準として、仏滅後の年時や末法時に入っているの計算がしてあるのは、本文の清書と密接な関係があるようである。聖人入滅の年を基準としないで、入滅・葬送・舍利蔵のことを書いたあとに、聖人滅後十四年の文永十二年から算定するところに、この年そのものになにか深い意味がある筈である。この年は、四月二十五日建治と改元となるが、それ以前の春さきに、本書の書写が完了したこと意味するものと思う。

『教行信証』の化土巻には、北齊の法上の説によって、周の穆王の甲寅の歳の積尊の入滅から元仁元年（一二二四）までの仏滅年数と入末法の年時の計算がしてある。尤とも、ここには十年の誤算があるが、この元仁元年については、すでにさまざまの見解が発表されている。この年は法然上人の十三回忌であることも有力な一説である。後世からは、浄土真宗立教開宗の年として、今年はその七百五十年の記念すべき年柄である。文永十二年に、仏滅後の年数や入末法時の計算をするにも、その前年の冬に聖人の十三回忌がいとなまれ、それを機縁として『教行信証』の書写が発願され、これが翌年の春さきに完了したことを物語る奥書ではあるまいか。その願主と執筆者が、誰であるかは、明確にしたい点である。

文永九年（一二七二）の冬、親鸞聖人の墳墓の改修が行なわれた。それは聖人の末女、王御前―のちの覚信尼―が発起して、その主人小野宮禪念の理解のもとに、吉水に近い二人の居住の屋敷地内へ、鳥辺野の墓地から遺骨をうつし、遺弟達の協力によって大谷の廟堂が建立となった。両三年をへた文永十一年の冬、十一月二十八日、聖人の御正忌は、大切な十三回忌の法要にあたるので、新しくできたこの大谷の廟堂では、遠近各地から遺弟たちが参列して、厳粛な法事が営まれたことであろう。このときあたり、常随昵近の弟子であった蓮位に晩年の聖人が付嘱された真筆の草本『教行信証』を臨写して、この廟堂に安置することを発願し、これを命じた人は、聖人の末女王御前、のちの覚信尼その人ではあるまいか。墳墓の改修によって、聖人の遺身舍利は吉水の廟堂に埋葬することができた。聖人畢生の大著『教行信証』の真筆本を臨写することは、聖人の法舍利を安置することであり、やがて廟堂に御影像を奉安することに連らなる重要な事項である。これが親鸞精神を象徴する京都の本願寺教団成立の一大要因となっている。

聖人の末女王御前、のちの覚信尼が聖人の十三回忌を迎えて、真筆の草本の臨写を発願し、このことを長子覚恵に命じたとしても、敢て不自然ではない行為である。

大谷の御影堂から本願寺成立までには、その留守職となった覚恵・覚如父子の存在を無視することはできない。その覚恵は、日野広綱と王御前のあいだに生まれた嫡子で、父の早逝によって七歳で青蓮院の二品親王尊助の門に入り、祖父の聖人往生のときは、すでに二十歳であった。文永五・六年のころに隠遁の身となり、長子覚如が三条富小路で生れたのは、文永七年十二月二十八日のことであった。その後、二・三年で妻の中原氏が死没し、覚如は長子をつれて吉水の小野宮禪念・王御前の家族と同居したようである。聖人の十三回忌を迎えたとき、禪念（その翌年死没）、王御前は五十歳、異父兄の覚恵は三十一歳、異父弟の唯善は八歳、長子覚如は五歳であった。このと

き聖人の末女王御前が願主となり、聖人の孫にあたる覚恵が生母の委嘱をうけて、今日、西本願寺に伝世する清書本を執筆したのではあるまいか。その後、覚恵は、生母覚信尼から譲状をうけて大谷の留守職となり、義弟唯善との紛争もあるが、よく大谷の御影堂を守って、これを長子覚如に譲っている^④。若くしては生母覚信尼をたすけ、年老いては長子覚如を支持して、大谷本願寺の基礎を確立することに生涯をささげたのが、覚恵その人である。本願寺の世代には、三代伝持―親鸞・如信・覚如―の上から表面にでない人であるが、その背後の功労者として、本願寺史の上からは、忘れることができない。隠遁の生活にはいった覚恵が、祖父聖人の十三回忌を大谷の廟堂で迎えこれを記念して、あるいは母覚信尼の発願によって、遺弟の蓮位が所持していた真筆の草本『教行信証』を忠実に臨写したものが、現存する西本願寺清書本であることは、ほぼまちがいのないものと思う。さればこそ、鎌倉時代から室町・江戸時代を通じて、終始一貫して本願寺に伝世したのである。これに、異本として尊蓮見写本を参照するのが、覚如・存覚の時代であり、真宗の聖教として粘葉本の体裁をととのえるのは、室町時代からのことである。

四

先年、高田専修寺の宝庫から慶長五年（一六〇〇）書写の『教行信証』の識語が学界に紹介された^⑤。その内容は、高田専修寺の堯真門跡が信楽院慶忍に命じて書写したものの化身土巻の末尾にある奥書で、(一)本典の跋文、(二)聖人自筆本の相伝の事情、(三)その開版の希望と夢告、(四)その出版の経緯―願主と施主―、および(五)その刊記など、三十二行にわたる長文の記録である。以下、その分析と検討を試みたいと思う。

(一)その跋文、五行六十六字の文章である。

今此教行証者、親鸞法師選述也。立章」

於六篇、調卷於六軸。皆引經論真文、各備往」

生潤色、誠是真宗紹隆之鴻基、実教流布」

之淵源。末世相応之目足、即往安樂之指」

南也。

これと殆んど同文の跋が、江戸時代の四刊本—寛永・正保・明暦・寛文の諸版—の末尾にある。さらにさかのぼって、宝徳三年（一四五二）の右筆蓮如の書写本や巧如所持・芸範伝授のものにも、あるところから、覚如・存覚の時代にその製文をみた跋であろうとされてきた^⑩。しかし、存覚の元亨四年（一三三四）の写本には、今日その化巻を欠き、また存覚の『六要鈔』にも、この跋文には言及していないので、全くの推測であった。ところが、この識語によって、すでに鎌倉時代に、『教行信証』を出版するとき、これが添付された跋文であることが判明した。

(二) 聖人自筆本の相伝の事実。先の跋文のあとに

而去弘安第六曆。歳次癸未春二月二日。彼親鸞自筆本一部六卷。従先師性信法師所、令相伝畢。

とある。ここには聖人滅後二十二年、弘安六年（二二八三）聖人の自筆本である『教行信証』六巻を先師性信法師のところから（性海が）相伝したというのである。親鸞自筆本一部六巻こそは、今日、東本願寺に伝わる国宝の真筆草本そのものである。

現に国宝の真筆草本の行巻や化巻末には、本文とは全く別筆で

弘安陸未二月二日 釈明性 讓預之

とある。行巻のこの文の次下が一行ばかり切り取りとなっているが、化巻のところの次下には「沙門性信（花押）」の文字があるから行巻にも同じ文字があった筈である。草本にみる別筆の奥書は、字句に不可解なところもあって

古来、疑問視されてきたが、この識語によって新しい事実も判明した。ここには性信から相伝した人名をあげないが、後文によれば性海でなければならぬ。ところが現存の国宝本には、性海とは全く別人の明性の名がある。江戸時代に真筆の草本から臨写した箸尾教行寺本の外題や尾題には

顯浄土方便化身土文類六本 釈性海

とあるという。そこで明性と性海とは、同一人物か、別人かが問題である。これが専信房専海の如く、明性房性海であれば問題はない。『親鸞聖人御門弟交名牒』には、下野国横曾根の性信のもとに、明性や性海の名が見られないのは遺憾である。

(三)その出版の由来を述べて

為報仏恩、欲企開板於當時伝、弘通於遐代之刻、有度々夢想之告矣。

(イ)于時正応第三天歳次庚寅冬臘月十八日夜寅尅夢云。当副將軍相州大守平朝臣、乳父平左金吾禪門法名 果円屈請七口

禪侶、被書写大般若経、彼人数内被加於性海、而奉書写真文畢。爰白馬一疋金錢一裏令布施之覚、而夢惺畢。

(ロ)同辛卯四年正月八日夜夢云。当相州息男年齢十二許童子、来而令正坐於性海之膝上覚、而夢惺畢。

(ハ)同廿四日夜夢云。先師性信法師化現而云。教行証開板之時者。奉触子細於平左金吾禪門、可刻彫也。言已乃去覚、而夢惺畢。

(ニ)同二月十二日夜夢云。有二人僧云。持五葉貞松一本松子一箇、来与於性海。覚而夢惺畢。

依上来夢想、倩案事起、偏浄教感応之先兆、冥衆証誠之嘉瑞也。若爾者、機縁時至、弘通成就者歟。

仍奉触子細於金吾禪門、即既蒙聽許。而所令開板也。

とある。弟子の性海は、先師性信法師から聖人自筆の『教行信証』六卷を弘安六年（一二八三）の二月二日に相伝し

て以来、これを開版して世に弘通せんことを希望していた。それについて、正応三年（一二九〇）の冬から春にかけて、度々夢想の告げをうけたことからその機縁が到来したと痛感して、夢にみた平左金吾（禪門果円）に、その出版費の援助を願ひ出ることとなった。

五

ここに平左金吾禪門とは、平左衛門入道果円、すなわち鎌倉幕府の執権北条貞時の家令、長崎（平）頼綱のことである。この頼綱の父、平盛綱が執権北条泰時の家令となったのは、先の家令尾藤景綱（入道道然）が死亡したので、文暦元年（一二三四）八月二十一日そのあとをついだのである。それ以来、この家は世々執権北条氏の家令であった。弘安四年（一二八四）四月、北条時宗が三十四歳で歿したとき、一族従者三十四人が出家入道したというから家令の頼綱も、このとき入道となり、果円と号したのであらう。ときに後嗣の北条貞時は僅か十四歳であったから彼が乳父の役をつとめたのである。このとき、外祖父の秋田城介安藤泰盛らが、執権の若輩につけこんで、一族が権勢をふるい、これをきらった家令の頼綱は、弘安五年（一二八五）十一月、泰盛・宗景の父子を攻め亡ぼした。執権貞時の家令平頼綱（禪門果円）が独自の活躍するのはこの後のことである。横曾根門徒の性信の弟子性海は、しばしば夢告をえて『教行信証』開版の機縁が淳熟したと確信をもち、鎌倉幕府の執権貞時の家令長崎頼綱に、その旨を願ひいで、幸いにもその聴許をえたので、すぐにその出版のはこびとなった。

（四）この版本『教行信証』の權威については

然此本者、以親鸞自筆御本、令校合、令成印板者也。庶幾、後世勿令加減於字点矣。

とある。この版本は、親鸞聖人の御自筆本により、その校合も厳密にしたものであるから後世の人々は、その字句

に加減をすることがあつてはならないと、本書の伝統と内容の權威を明記している。

(四)このときの開板事業の始末については

本云。于時正応四年五月始之。同八月上旬終功畢。

とある。これは正応版の刊記である。聖人が晩年蓮位に付嘱された真筆の草本『教行信証』は、文永十一・二年のころ京都大谷の廟堂において臨写がなされたが、その後坂東に伝来して横會根門徒の性信から性海に相伝された。それが正応四年（一二九一）の秋に、性海が願主となって、鎌倉幕府の執権の家令、長崎頼綱を檀越として、関東の地鎌倉においてその出版をみたのである。これは聖人滅後三十年、鎌倉末期のことである。

このころ京都の大谷の廟堂では、覚恵・覚如父子の留守職の時代である。この父子は、時恰も聖人の遺跡をたづねて東国を経廻している最中であつたが、本典出版の事情についての見聞は、なにも記録を伝えていない。この正応版の装幀や体裁は、全く不明である。上述の長い識語をもつ慶長五年（一六〇〇）の写本は、袋綴一頁六行、每行十七字詰一の冊子本であるが、これももし正応版の原形を伝えるものならば、驚くべきことである。なぜならば鎌倉時代の出版の様式は、経論には古い卷子本か、新しい折帖の形式を守り、注疏の聖教には和風の帖葉の帖仕立である。大陸渡来の新しい袋綴の方冊本は、唐様の五山版として、このころ東福寺普門院で諸禪師の語録の開版をはじめたばかりである。当時、東国での本典の出版は、和風の粘葉本や唐様の方冊本とは考えられないから古い卷子本の様式で、每行十七字詰とし、長文の識語は化巻の末尾に、一字さげた十六字詰で、出版の由来を三十二行に掲げて刊記としたのであるまいか。正応版の関東における流布と伝播は、今後資料をあげて検討すべきである。それが京都の大谷本願寺などへの影響は、すでに室町の初期から現はれているようである。第一は跋文をもつ粘葉本の古写本があるからである。第二は、文明二年（一四七〇）書写本の奥書には、正応版の識語の跋文を写し、そのあ

との長文を抜萃して

而去弘安六曆歲次癸未春。于時正応四年 八月始之。同八月上旬終功畢。

とある。はじめの字句は文意を失っているが、慶長五年の長文の識語を参照することによってようやく、その解読ができたのである。これら古写本の奥書や識語によって室町時代の『教行信証』流伝の系譜を解明することができるのである。因みに、大檀越の長崎頼綱は、その後執権貞時が成人するにおよんで、頼綱・宗綱父子の横暴をくみ、外祖父の敵であるとしてこの父子を鎌倉の経師ヶ谷に征め亡ぼし、父子は永仁元年（一二九三）四月自害して一族九十三人は火中に投じて死に尽してしまった。執権北条実時の家令長崎頼綱の権勢は、僅か八・九年のことであったが、その間に親鸞の真筆の草本が、聖人滅後三十年にして、早くも東国鎌倉の地で開版をみたことは、真宗の聖教伝持の歴史上でも、特に重要な問題であった。

六

聖人が真筆の草本の見写を許された場合、それは聖人の在世中からその滅後においても、その筆者は深い感激を心にひめて、原本に忠実な臨写をする態度であった。尊蓮のときも必ずや、左様であったと思う。専信房専海のときも、滅後、聖人を追慕する人が文永年間に、その見写をしたときも、聖人の人格やその人間性はまだ消え失せず真筆本の体裁をよく守って、当時としては大陸伝来の最も新しい袋綴の方冊本の形態であった。その本文を七行本としたことも、毎行の字詰を十五字内外であることも、すべて忠実に真筆本の踏襲であった。その本文の文字の字劃にいたるまで、聖人依用の宋朝式の欠劃文字に、四声点の圈発や句読・左訓まで、丹念に写しとる心がまえであった。ここに聖人の真筆本を見写した鎌倉時代の臨写本の特色があった。これが、今日、高田専修寺や西本願寺に

伝世するいわゆる清書本の特異性である。

これが聖人の滅後半世紀をすぎ、遺弟から法孫・法曾孫の室町時代となると、『教行信証』は漸次転写の時代となった。これと共に真宗教団の聖教としての形態を整えつつ、良質の烏ノ子の料紙を使用して和風の粘葉本に一行本・毎行十七字詰―その体裁を整えるのである。これは宗教的偉人の人格とその教説が、その滅後、教団の社会的発展にともなう必然的な現象である。その教を信奉する人びとが多ければ多いほど、宗教的偉人の人格は教祖的な取扱いとなり、その著書は聖教としての權威を製書や体裁の上にもまで発揮するのである。これと共に聖教伝授と教学の研究が盛んとなるのである。これは中世における真宗教団の教学の実態として、近世の江戸時代に展開するその源泉として、聖教伝持の特色を認めねばならぬ。

(一九七三、九、二六)

註記

- ① 平松令三氏 高田宝庫より発見された新資料の一二について(高田学報四〇)
- ② 山口の明厳寺の所蔵本、今夏龍谷大学真宗学教授石田充之博士の御好意で拝見することができた。
- ③ 藤島達朗氏 教行信証の書誌(国宝影印本解説所収)
- ④ 中井玄道氏 校訂教行信証 付録 異本解説
- ⑤ 鈴木宗忠氏 教行信証の真蹟本について(文化五ノ三)
- ⑥ 生桑完明氏 高田伝来の教行証真本について(真宗研究 二) 親鸞聖人撰述の研究 所収
- ⑦ 拙稿 草本教行信証の異筆者(印度学仏教学研究一八ノ一)
- ⑧ 覚恵の大谷留守職事、正安四年(一三〇二)五月廿二日

教行信証の書写と印刷

国々の御門弟の御中への状案 本願寺史第一卷第三・四章

参照

① 参照

③ 参照

追記

昭和四十八年九月十五日仏光寺本山の講堂で、私見を述べた翌日、重見一行氏から「西本願寺本教行信証について―その書誌学的考察―」の技刷(仏教史学第一六卷第二号掲載の予定)一部の寄贈をうけた。綿密な西本願寺本の実体調査の報告である。阪東本より直接に臨写したこと、高田本より書写の意図が慎重であること、成立時期は文永十二年頃と断定できるなど、詳細な観察が実証的に報告されている。啓蒙される点が多い。併せて参照されたい。